

建築遺跡の整備と問題点

— 日中韓建築文化遺産保存 国際学術会議から —

はじめに 奈良文化財研究所では、建造物研究室を中心として、中国文化遺産研究院、韓国国立文化財研究所の建築史関係者との研究交流をおこなっている。2009年からは建築文化遺産保存国際学術会議をシンポジウム形式で開催しており、『紀要2011』、『紀要2012』でも、その概要を報告した。

2012年度は、韓国国立文化財研究所がホストとなり、「建築遺跡の保存と活用」をテーマとして、11月6～8日に開催された。6日はエクスカージョンとして、ソウル近郊の揚州檜巖寺址、坡州惠蔭院址を視察し、7・8日は、ソウルの国立古宮博物館を会場としてシンポジウムをおこなった。のべ約200名の聴衆が集まり、関心の高さがうかがえた。シンポジウムは3つのセッションに分かれ、表5のように、各国3名ずつが発表した。

シンポの総括 発表の概要はタイトルをご覧いただければおよそ察しがつくであろうから、ここではシンポジウムを筆者なりに簡単に総括し、主として韓国や中国における建築遺跡の整備に関する考え方や、その問題点等をさぐってみたい。

まず、シンポジウムを概観すると、中国からはセッションにとらわれない具体的な事例の報告が3本あったが、現段階の研究レベルを含め、整備に対する理念や制

度についての言及がなかったため、中国での基礎的な考え方の有無、あるいはその内容は各事例から推察するしかなかった。日本と韓国の発表からは、およそ遺跡整備の理念や方法といった基本的な考え方は同じと認識できた。理念あるいは制度的な部分が明確にならないと、具体的な事例や活用に対しても、コメントしづらい側面があった。具体例では、中国の発表3本は、それぞれ一つの遺跡を取り上げ、保存や整備（展示）の技術などに踏み込み、その遺跡の特徴を活かした事例の紹介があった。韓国と日本の発表では、整備手法の分類と若干の具体例が挙がるのみで、表面的な話題提供に終始した感が否めなかった。活用のセッションでは、韓国から慶州・皇龍寺の整備活用計画についての紹介があった。これは2035年までの壮大なプロジェクトであり、興味は尽きないが、シンポジウムとしてはもう少し一般的な話題のほうが、議論の対象になりえたと感じた。

総じて、テーマである「建築遺跡」の概念が、以下に述べるように国ごとに異なっており、議論がかみ合いにくい発表となった。しかしながら、お互いに他国の発表に対して、改めて建築遺跡とその整備の考え方や技術、方法等について、新たな視点に気づかされる良い機会になったと考えている。

建築遺跡の概念 木造の建築文化が主流の日本では、掘立柱建物と礎石建物、基壇建物などの基礎構造をもとにした建物種類の分類があり、遺跡整備の対象としては、主に集落や官衙、寺院の遺跡などがある。少なくとも、私たちはこのような遺構を建築遺跡と認識していた。

一方、韓国では、訪問した檜巖寺址や惠蔭院址が、やや山間部に入った斜面地に、礎石や基壇、斜面の基礎となる擁壁などを良好な状態で残す遺跡であり、他の事例を見ても、およそ遺構の残存状態の良い大規模遺跡を建築遺跡と認識していることがうかがえた。日本と同様、建物は木造ながら、基礎部分等に石造構造物を多用する、まさに韓国らしい遺跡という感想をもった。

一方、中国では、古くから石とともに日干しレンガや磚を用い、これを材料として建物とする場合がある。張曉彤氏の紹介した甘肅省の墓闕は、魏晋時代の墓だが、基壇と本体に分かれた構造体は、いずれも日干しレンガで造られており、高さは7.6mもある。遺跡というより、まさに傷んだ建築であり、その保存と整備は、建築の修

表5 シンポジウムの発表内容

セッション1 建築遺跡の調査と研究	
・ 金 徳文 (韓国)	韓国建築遺跡における保存整備技術の現状と課題
・ 箱崎和久 (日本)	日本における建築遺跡の調査と研究
セッション2 建築遺跡の保存と整備の技術	
・ 査 群 (中国)	建築遺跡の保護事例 —福建省泉州市德濟門遺跡の保護と展示—
・ 韓 旭 (韓国)	韓国の建築遺跡における保存・整備の事例
・ 高橋知奈津 (日本)	日本における建築遺跡の保護と整備の技術
・ 張 曉彤 (中国)	甘肅省瓜州県踏実1号墓墓闕保存修復研究
セッション3 建築遺跡の保存と活用	
・ 梁 潤植 (韓国)	韓国における廃寺址遺跡の活用方案
・ 崔 明 (中国)	大運河及び周辺遺跡の活用と展示方法 —南旺分水遺跡水利施設の事例—
・ 黒坂貴裕 (日本)	日本における建築遺跡の整備活用

復に他ならない。同様の概念のものに、韓国の金徳文氏が紹介した慶州の石窟庵も含まれるだろう。

また、中国の崔明氏が紹介した北京と杭州を結ぶ大運河の遺跡は、単なる石造の土木構築物の遺跡ではなく、運河とともに栄枯盛衰をともした龍王廟の古建築群を含み、土木・建築複合遺構とも呼ぶべき遺跡である。中国の査群氏が紹介した元代の泉州徳濟門の遺構も、中国の古城に開く門の遺構であり、中国らしい規模の大きな石造建築遺構であった。

以上からわかるとおり、各国における建築遺跡の概念は異なり、発表後の討論の際にも話題に上がったが、一定の問題点をもとに、議論を俎上にのせるのが困難であった。しかし、遺跡整備というテーマの裏に潜む意図をうかがえば、建築遺跡とは遺存状態の良い大規模建築遺構群、と呼び替えるのが適当だろう。日本においてあえて類例を挙げるとすれば、古代の例では太宰府正庁跡、甲賀寺跡(滋賀県甲賀市)など、その数は多くない。中近世では、石垣をともしなう近世城郭や沖縄のグスクなどが挙げられるだろう。強いて言えば、巨大な庭園遺構がそういった概念に合致するかもしれない。このように、日本では例が少ないかもしれないが、その整備手法や考え方はまだ十分確立していない分野であり、中国や韓国では大きな課題として直面してきている現状がうかがえた。

保存と活用 発表で印象的だったのは、韓国の金徳文氏が、保存と活用を相反する行為と述べた点である。はじめ筆者はそれを十分理解できなかったが、具体例の報告が進むにつれ、上記のような建築遺跡では、それをそのまま見せることによって、観覧者に遺跡の迫力やおもしろさなどを直接伝えることができる一方、石材が劣化したり、雨水によって土砂が流出するなど、何らかの破壊を免れることができないことを認識することができた。覆屋のような保存施設を設けて保護するといった手法も想定されるが、遺跡自体が大規模なため保存施設も大規模となり現実的でない。保存科学的な手法による石材の保存処理といった対策も、長期的な視点で見た場合に是非があることが指摘された。

一方、礎石や基壇外装が良好に残る場合、盛土による保護と整備という手法は、日本でもそうだが、とりによく方法である。韓国では過去の寺院遺跡の整備で、盛土による整備の際に、発掘された礎石や基壇外装を取り外

して、復元的に整備することが比較的多かったらしく、金徳文氏は「合理的な真实性の侵害」と批判的に述べている。現代の盛土整備でも、禁じ手のように発表していたところを見ると、発掘された礎石そのものを見せることを原則と考えているようだ。

また、芝による整備も、金徳文氏よると歴史的イメージを歪曲する恐れがあり、歴史の事実にもとづいた完成度の高い技術的な方法とは言えない、と否定的であった。礎石や基壇外装の残る旧地表面に芝を施すのは、当時の地上の状態と異なると考えるためだろう。

真正性の問題 意外かもしれないが、今回の議論で、礎石などをレプリカで整備する手法については、話題に上らなかった。中国や韓国では、あくまでも遺構そのものを見せることを原則としているためと推察する。このように考えるのは、中国や韓国は日本に比べ石造文化財が豊富で、遺構の遺存状況も良いという背景から、遺跡のオーセンティシティ(真正性)に対して忠実であろうとする姿勢がうかがえる。

その延長上の議論として、韓国の金徳文氏の発表からは、先述のような芝による整備さえも否定的で、遺構の本来の姿を重視する考え方が背景にあるようだ。また、梁潤植氏からは、皇龍寺の整備活用には、寺院として本来の機能の再現も必要との提案があった。しかし、遺跡の整備・活用は、基本的には現代的な要求もたらす機能から生まれるのであり、真正性の確保のように訴える金徳文氏や梁潤植氏の考え方も、その一案に過ぎない。つまり、地上部分の整備の真正性は程度問題でしかなく、遺跡の真正性とは異なる視点であると筆者は考える。そういう意味では、真正性の問題で常に取り沙汰される建物復元も、遺跡の真正性とはやや異質の論点であろう。

まとめ 少なくとも今回のシンポジウムからうかがう限り、中国・韓国とも、制度や手法、考え方の各観点で、どの建築遺跡にも対応できる確立したものはなく、整備にあたっては、遺跡ごとに模索している状態にある。すでに整備された事例も、それぞれ一定の論理のもとで試考されており、この過程を整備報告書として記録すべきだろう。日本では数少ない建築遺跡の事例だが、中国や韓国で竣工した各例も、維持管理や遺構自体の劣化といった観点を含めて、先行事例として今後参照すべき成果と言えるだろう。

(箱崎和久)